

模擬授業 高等学校公民科「現代社会」の討論授業

小野 繁樹 (埼玉県立越谷東高等学校)

はじめに

アクティブ・ラーニングと呼ばれる授業スタイルが目指す目標の一つに、「書く・話す・発表する」等の活動を通して個々人の思考をさらに深めていく、という点がある。

高校一年生公民科「現代社会」の単元に「少子高齢化(人口減少)」があり、これとの関連で「赤ちゃんポスト」を採りあげ、生徒たちにその賛否を問うた(授業参観した県の指導主事からはタイムリーなテーマという評価を頂いた)。

浅野誠(2002)の教示による「紙飛行機討論」の手法を用い、個人思考の掘り下げを目指す高校公民科討論授業の一端を紹介する。

1 導入

授業開始とともに教科書・ノートをしまわせ、鉛筆一本だけ出すよう指示し、討論授業の開始を宣言。

前時で学んだ「少子高齢化」を振り返り(特に「少子化」)、現代日本は子どもの数の減少に歯止めがかからず、その結果総人口も減り続けていることを強調する。

が、その一方、人工妊娠中絶は毎年20万件前後のペースで行われており(公式の届け出数は2014年度18万件)、また様々な事情による望まない妊娠の結果、追いつめられた親の手で闇に葬られた赤ちゃんの実数は不明であることにも触れる。

もし人工妊娠中絶が行われなければ、日本では毎年20万人前後の新しい生命が生まれることになり、「少子化」の進行に少しは歯止めがかかるのではないかと投げかけ、テーマ「赤ちゃんポスト」につなげてゆく。

2 討論授業の展開, その前半

前半は「赤ちゃんポストって、なに?」と題した自作プリントを使ったレクチャーである。

例えば一人の妊婦がいて、中絶可能な22週を過ぎた後に相手の男性に妻子のいることが判明。その男性は姿を消し、連絡がとれなくなり、無収入の妊婦は窮地に陥る。

こうした母子をとりまく厳しい状況にいちるの救いの手を差しのべるべく、医師蓮田太二によって熊本慈恵病院に「赤ちゃんポスト」(正しくは「このとりのゆりかご」)が開設されたのは2007年であり、以来、2017年3月までに130人の赤ちゃんが預けられた。

預け入れる理由としては「生活困窮」が最も多く、「未婚」「不倫」等がそれに続く(「朝日新聞」2017, 5, 7)。

ポストに預けた親130人のうち、病院の聞きとりや児童相談所の調べで103人は身元が判っている(うち1人は外国籍)が、27人は全く判っていない(NHK「クローズアップ現代 ぼくの生みの親はどこに?」2017, 6, 8)。

開設以来、ポストをめぐる様々な議論が交わされてきたが、なかでも最も鋭く賛否が分かれたのは「匿名」の是非をめぐる問題であった。

病院に置かれたポスト周辺に監視カメラは設置されていないから、赤ちゃんを預けた親が黙って立ち去ればその身元は判らない(ただし病院では預ける前にまず相談するよう促している)。

ここに、成長した子どもが思春期を迎える頃、己の出自が不明であることに苦しむという問題が浮上してくる。

ポストに関わった関係者の証言を模造紙に大書し、それを人型マークとともに黒板に貼り出していく。

ポスト設置を許可した前熊本市長は「私が許可したことで子どもは親が判らなくなった」と、今なお悩みの中にある。県教委や県・市の役人は「(親が判らないままで)子どもの発達をきちんと保障出来るのか?」「他県の子どもも熊本県の費用で育てるのか?」という疑問を口にし、また主役たる母親の多くは「(出産を)だれにも知られたくない」という、第三者には何い知れない強烈な感情を抱いて子をポストに預けている。そして子ども自身は「実の親はどんな人で、自分はどうやって生まれたの?」と、自分の過去と現在を小さな体で懸命に考えている(里親等の一部はポストに預けられた旨を本人には正直に伝えている)(NHK「同」)。

授業前半の最後は、ポストをめぐる最新の動きを報じた新聞記事見出しを拡大コピーし、それを黒板に貼り出し、コメントを加える(特に神戸のNPOが二番目のポスト開設を目指したが、市当局から許可されなかったという一件は多くの問題点を投げかける)。

3 討論授業、その後半

生徒たちにシートを配る。それは記入欄が縦四段に分かれているから、先ず最初の欄にポストに対する賛否とその根拠を記入させる(短文でよいと指示)。

記入したらシートを紙飛行機にする。

ここで改めて、今回の学習の狙いを明確にする。

「他人の意見に触れることで、自分の考えをさらに深めてみよう」

「他人の意見に触発され、自分の考えが変化し修正されることは大いに奨励される」

合図とともに一斉に紙飛行機を飛ばす。

一番近くに落ちたものを拾わせ、開き、最初の欄の意見への賛否とその根拠を二段目に書かせる。

これを繰り返す。

最終フライトの後、四段目への記入にあたり、上記3人はどのような意見を述べているか、「賛成」で一致していればその共通点は? 「賛否」に分かれていればその相違点は?を確認させ、それを受けて最終的な自分の意見をまとめてみる。

何人かを指名し、全員の前で発表させる。

「この問題については、大人たちが議論するよりも、子どもの意見の方が大切だと思う」

(男子)

「今の日本はこのようなポストを作らねばならないほどになっている。議論の前に、子どもを捨てなければいけない環境をなおすべきだ」(女子)

特に後者の女子の意見は、「赤ちゃんポスト」に開設当初から関わってきた元看護師・田尻由貴子氏の問題意識と同水準のものであった(「私はこうのとりのゆりかごが作られたときから、こうのとりのゆりかごのいない社会になってほしいと願ってきました」田尻2016)。

4 留意点

筆者の自作プリントは手書きであり、黒板に貼り出す模造紙にも手書き文字が躍るなど、教材・教具の類はアナログで作製している。

県教委はパワーポイント等の電子教材の利用を推奨しているから、授業参観した指導主事はアナログの全面展開にいささか面喰らっていたが、しかしこうした授業にも勿論明確な狙いがある。

もし授業が教師による一方的な「しゃべり」だけで完結するとしたら、それは生徒の側にとってはかなり不親切ということになるだろう。

「聞くものというのは、一瞬一瞬消えていく情報」であり、これに対し「見るものというのは、見せている間は消えない情報」(竹内吉和 2012)である。

手書きの模造紙や、医師蓮田太二、いたいけない幼児の肖像写真、そして関連する新聞記事の見出し等で黒板が埋めつくされることで(しかも一度貼り出したものは終了時まではずさない)、教室内の風景は皮膚感覚あふれるビジュアル世界に一変する。

右も左もテーマに関わる情報ばかりだから、生徒たちはいやがおうでもテーマと正面から向き合わざるをえない。

情報の「可視化」である(パワーポイントとて、十数秒後には消えていく情報であろう)。

指導主事氏にも変化が見られた。事後の研修会の席上で、「情報提供の方法に迫力とインパクトがあり、視覚教材としても魅力的な授業であった」という講評を頂くことになったわけだから。

では、この授業で生徒一人ひとりの思考は深まったのか?

指導主事の一人は参観中、最後列のある女子生徒に注目していた。その生徒がシートにどのような記述をするのか、そしてそれがどう変わっていくのか定点観測していた。

他者の意見に触れるたびにその生徒の賛否は微妙に変化していき、そして彼女の書く根拠の中身も次第にふくらみを増していったという。

まとめ

中学・高校の現場で「不登校」の問題はなお解決されておらず、大学においても近年「ぼっち族(一人ぼっち)」の増殖が指摘されている。

有名大学に何人合格させたかがこれまでの高校の評価につながっていたわけだが、もっ

と長いスパンで子どもたちの成長に責任を持つとするなら、「読む・書く・発表する」という諸活動，即ちアクティブ・ラーニング型授業を通して子どものコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高め，自ら考え，選択し，他者とつながれる生徒を実社会に送り出してやるのが急務となっていることは論をまたないであろう。

アクティブ・ラーニングは教科・科目によって相性の差が大きい，とか，大学進学実績には貢献しないなどと言う教師が今なお現場にはいるが，そのように発想する余地はもはや今後の現場には存在しえなくなるほど，この授業スタイルは教師自身の倫理性をも根底から問うものとなっている。

確かに，アクティブ・ラーニングという「いま求められる新しい授業形態」（溝上慎一 2016）は，それだけの衝撃力を持っている。

参考

- ・浅野誠『授業のワザ一挙公開』大月書店 2002年
- ・田尻由貴子『はい。赤ちゃん相談室，田尻です。』ミネルヴァ書房 2016年
- ・竹内吉和『発達障害と向き合う』幻冬舎 2012年
- ・溝上慎一監修『高等学校におけるアクティブ・ラーニング 理論編』東信堂 2016年